

満開の桜によせて

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀友則

【意訳】 こんなにも日の光が降り注いでいるのどかな春の日であるのに、どうして落ち着いた心もなく、花は散っていくのだろうか。

うららかな春の日差しを受けながら、風に吹かれて散っていく桜の姿に心動かされる人は多いと思います。約1100年前の人々も同じ思いでした。散る桜に、世の無常や限りある時間の中に生きる人間の生命と重ね、はかなさや寂しさを感じずにはられません。平安時代の桜は、現在主流の品種であるソメイヨシノではなく、山桜の一種だといわれています。当時は、「花」といえば「桜」を意味しました。

今年も竜王山の桜が見事に咲き誇りました。1日の大会で約6試合をこなす競技かるたは、知力だけでなく、体力や瞬発力も求められます。山陽小野田市出身の2人のかるたクイーンは、毎朝竜王山を走り、厳しい体カトレーニングをしたという逸話があります。ぜひ皆さんも竜王山に足を運んでみてください。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ